ローカルメディアと地域生活文化圏

大分県日田市と大山町のケーブルテレビを通して

福岡女学院大学　寄藤晶子

１．目的

人と場所の関係をとり結び、個人的・社会的世界観を形成するのに、メディアの制度や活動を欠かすことはできない（バージェス＆ゴールド 1993）。地方都市が、持続可能な生活文化圏をいかに構築するかという取り組みに、ローカルメディアの機能と役割がどのように関わってきたのか、またそれは現在どのような課題に直面しているのかを明らかにし、地方の社会解体的危機に抗する新たな「地域生活文化圏」形成の可能性を考察するのが、本報告の目的である。

２．方法

ローカルメディアの設立理由や放送内容の変遷から、「旧日田市」「旧日田郡大山町」において地域住民が内発的に形成してきた、それぞれの「生活文化圏」の特徴を明らかにする。具体的には、1982 年設立の日田市の民間ケーブルテレビ局「KCV コミュニケーションズ株式会社」の設立背景や、放送内容と作り手の意識の変化、合併後の課題を聞き取り調査等から示す。また、大山町の有線放送（1957 年放送開始）、大山町有線テレビジョン OYT（1987 年開始）の開局目的や放送内容・番組編成を文献資料等から整理する。

３．結果

KCV コミュニケーションズは、旧日田市の難視聴状態を解消すべく設立された。その“アンテナ”は大分ではなく、福岡を向き、「福岡の情報が映ること」が重視された。地域社会と情報化という文脈の研究では、既存の大手メディアに対して、ケーブルテレビは地域に根ざしているという前提に立ちがちであるが、開局の目的としての難視聴の解消、とりわけ特定の地域の放送局を指向する姿勢と、近年の地域発情報番組への動きとを分けて捉えて、地域のありようや「生活文化圏」を考察する必要がある。

大山では、九州初となる有線放送、さらに有線テレビの導入を通して、営農指導や村長講話が放送された。NPC という独自の地域づくりにおいて、ローカルメディアが果たした役割は少ないと考えられる。合併後に同じ「日田市」となった両地域だが、ケーブルテレビというローカルメディアに期待されていた役割も、そこに描かれた世界も大きく異なる。現在の日田市全域をカバーする情報発信を担う KCV コミュニケーションズの存在は、新たな「地域生活文化圏」形成の鍵と見られるが困難も多い。

文献：バージェス＆ゴールド編著（竹内啓一監訳），1993,『メディア空間分化論―メディアと大衆文化の地理学』古今書院.

本研究の一部には科研基盤（B）26285112（研究代表:西村雄郎）を用いた（研究協力者）。